

地域の文化と誇りに焦点を当てた貼り絵の共同制作

— 東日本大震災の復興支援活動の実践から —

橋本 時浩

2015年8月20日に岩手県上閉伊郡大槌町の町立大槌小学校（以下、大槌小学校）、同年8月21日に岩手県大船渡市の市立赤崎小学校（以下、赤崎小学校）と同市立蛸ノ浦小学校（以下、蛸ノ浦小学校）を訪問し、東日本大震災で被災した小学校への復興支援活動を行った。この活動は「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」に申請し採択を受けて実施されたものだが、活動したグループの構成員が筑波大学の附属特別支援学校教諭・生徒であったことから、その保有する教育資産の有効な活用という視点を盛り込んだ総合的な復興支援活動となった。活動の中心は「貼り絵によるワークショップ」で、大槌小学校では「地域の風景・考古園」「地域に伝わる文化・虎舞」、赤崎小学校と蛸ノ浦小学校では「地域の風景・大船渡の海」を制作し、これ以外にも被災地域でのインクルーシブ教育の実践等の活動を行った。ここでは、「貼り絵によるワークショップ」の活動の様子や成果を中心に「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」における復興支援活動の概要について報告する。

キー・ワード：復興支援活動 美術 図画工作 貼り絵 インクルーシブ教育

1 はじめに

「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」に「私たちの故郷を描こう—貼り絵で表現する故郷の文化と誇り—（東日本大震災で被災した地域の子どもたちの心のケアと郷土愛や誇りを取り戻すための支援）」を申請し採択された。またその際、支援する側が筑波大学の附属特別支援学校であることを踏まえ、保有する教育資産の有効な活用という視点からの総合的な復興支援活動も行った。目的は Table1 のように多岐に渡った。「筑波大学社会貢献プロジェクト」とは、すべての職員を対象とした学内公募型のプロジェクトであり、筑波大学と社会・地域等との多様な形での連携活動やその取組み等を、総合的に支援するものとして 2004 年度に創設されたものである。ここでは、「貼り絵によるワークショップ」の活動の様子や成果を中心に「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」における復興支援活動の概要について報告する。

また筆者は、2014年9月2日～4日にも「Book and Dream Project（ブック・エンド・ドリーム・プロジェクト）」の一員として被災地での復興支援活動に

関わった。この時の経験が「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」の活動内容に反映されていることもあり、これについても併せて報告する。「Book and Dream Project」とは、岩手県沿岸部の小学校に本を贈る活動を展開する岩手県盛岡市の被災地復興支援団体である(Fig.1)。

Table1 「筑波大学社会貢献プロジェクト」の目的

- | |
|---|
| <p>(1) 地域社会にもたらされる成果・効果等</p> <ul style="list-style-type: none"> a 被災地域の学校，児童，教職員への支援 b 筑波大学附属学校との交流と教育的資産の被災地域での活用による双方の教員の資質向上 c 心のケアを必要とする子どもたちと，筑波大学附属特別支援学校と専門家との継続的なつながり <p>(2) 大学教育との関連性</p> <ul style="list-style-type: none"> a 災害時の支援の在り方，特に寄り添う形での支援について，その方法と体制の構築 b 心のケアと美術教育との関連についての考察と，新しい領域での研究の推進 c 筑波大学が考えるインクルーシブ教育の推進 |
|---|

2 2014年の復興支援活動

「Book and Dream Project (ブック・エンド・ドリーム・プロジェクト)」の復興支援活動は、岩手県からの助成を受け、絵画制作に関するワークショップにも予算が割り当てられたことから、筆者は「貼り絵の共同制作」の企画を提出し、3日間の日程のうち9月2日の活動を担当した(Fig.2)。内容を貼り絵としたのは、限られた時間内で作品を完成させるという制約や、児童が負荷を感じないような作業内容を考える必要があったためであるが、この時に考えた制作のプロセスや方法は、翌年に実施する

「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」の活動に生かされることになった。

また、2014年度の活動の際に、震災のダメージから抜け出せない子どもたちやその子どもたちを見守る大人(教師)たちが疲弊している様子を目の当たりにし、次回に同様の活動を行う際には、絵画制作に関するワークショップだけでなく、心のケアを必要とする子どもたちと専門家との繋がりや、教師支援等も併せて行う必要があるとの考えに至った。

被災地域での復興支援活動には行政、民間企業、市民団体、ボランティア等、多くの立場からの関わり方がある。このなかで学校が学校に対して行う支援の在り方としてはどのような形が選択されるべきなのか、当初は漠然としたイメージしか思い描けなかったが、このときの活動を通して、支援の在り方を整理するための多くの視座が得られた。

2014年9月2日の活動は大槌小学校の教育課程に設定されている「ふるさと科」の授業の一環として実施した。以下に活動の一端を紹介する。Fig.3の「南部鼻曲がり鮭」の漁は大槌町の秋の風物詩である。鼻(吻)が鉤のように曲がっているのが特徴である。Fig.4の「宝来島(ほうらいじま)」はNHKで1964~1969年まで放映された「ひょっこりひょうたん島」のモデルとなった大槌湾内に浮かぶ島である。ともに児童や町の人々にとって誇りとなっている。活動終了後には、貼り絵を活用したアニメーション(鮭が世界を旅するというシナリオでBGMは大槌小学校の校歌である)も作成し学校に寄贈した(Fig.5~6)。



Fig.1 Book and Dream Project のポスター



Fig.2 ワークショップのポスター



Fig.3 貼り絵作品 (南部鼻曲がり鮭)



Fig. 4 貼り絵作品（宝来島・ほうらいじま）

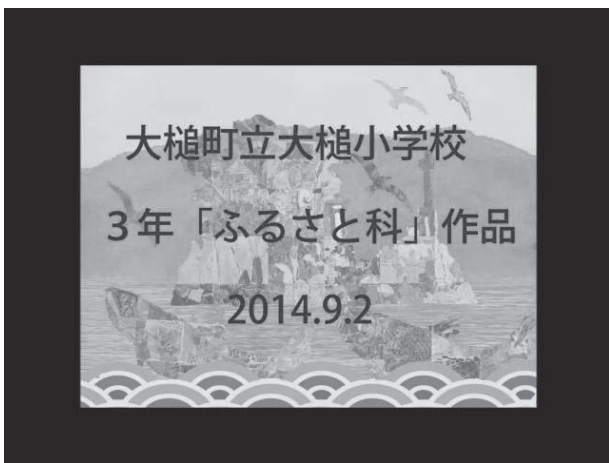


Fig. 5 貼り絵作品を基にしたアニメーション 1



Fig. 6 貼り絵作品を基にしたアニメーション 2

3 2015年の復興支援活動

2015年は「Book and Dream Project」による活動がなかった。そのため「貼り絵の共同制作」は「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」に申請し採択を受けた後に、その活動の一環として実施することになった。

(1) 支援する学校について

震災から4年が経過していたが、この時点で岩手県沿岸部には、仮設校舎、間借り校舎で授業を行っている小学校が2校残っていた。2014年に訪問した大槌小学校（Fig.8）と赤崎小学校（蛸ノ浦小学校の校舎を間借り）である。この2校の、施設・設備は十分に整っている環境にあるとは言えず、不自由さを感じながら過ごす児童たちにはストレスも蓄積されやすいと考えられた。特に赤崎小学校が間借りする蛸ノ浦小学校の校庭は仮設住宅が立ち並び児童が自由に活動できるスペースがなく、学校全体が閉塞感に支配されているかのような印象があった。

こうした実態を受けて、2015年は大槌小学校と赤崎小学校の2つの学校を訪問することにした（その後、赤崎小学校と間借り先である蛸ノ浦小学校はそもそもの児童数の少なさから2つの小学校の児童たちが混在する形で1つの学級として運営されていることがわかり、蛸ノ浦小学校の児童も本活動の対象に加わるようになった。そのため3つの小学校で活動を展開したことになる）。

なお、本活動が終了した後の2016年4月に大槌小学校と大槌中学校は統合され大槌学園となった。また2017年4月に赤崎小学校と蛸ノ浦小学校は統合され赤崎小学校となり、蛸ノ浦小学校は廃校となった。それぞれ高台の新校舎に移転したが、学校生活が震災前の状況に戻りつつあることを申し添えておく。

(2) 事前の打ち合わせについて

2015年5月27日に大槌小学校、5月28日に赤崎小学校を訪問し、各学校に対し支援活動の内容について説明を行った。「児童たちが生き生きとした表情で活動できる時間を少しでも増やしたい」「震災のダメージやストレスから不調になる児童が多い。その対応について一緒に考えることができれば」との回答をいただき実施に向けて準備を進めることになった。各自治体の教育委員会へは各校の校長が報告を行い、協力体制を整えていただいた。

実施時期については、岩手県内の公立学校が2学期の始業を迎え、かつ本校が夏季休業中である8月後半の10日間ほどの時期が双方にとって都合が良く、その時期で調整を行った。さらに訪問メンバー



Fig. 8 大槌小学校

は本校教員4名と高等部専攻科造形芸術科生徒1名、それに筑波大学附属大塚特別支援学校教員1名の計6名であることも伝え承していただいた。同日に、各校の担当教師と打ち合わせを行い、テーマは7月中に対象学年の児童が話し合っで決定すること、その結果やモチーフに関する資料の本校への送付は夏季休業中に行うこと、それを受けて本校で材料等の準備を確認した。材料にはB1パネル、絵の具、紙、クレヨン、台紙等があるが、これらは全て支援する側である本校がプロジェクト予算を用いて準備することとした。

(3) 貼り絵の共同制作について

貼り絵の共同制作のねらいは「地域の風景や文化を貼り絵で表現し、その美しさや良さを理解することにより地域に対する自信や誇りを取り戻すこと」「共同制作により人と人とのつながりや協力して物事を成し遂げることの大切さを知ること」の2つである。震災で慣れ親しんだ地域の風景や文化を失い、前向きになれないでいる児童たちの心に寄り添うような支援が必要だと考えた。「心に働きかけ、心の状態を整える」。こうした効果を期待できるのが美術や図画工作による復興支援活動であり、他にはない特性であると言える。

① 大槌小学校での活動

2015年8月20日、大槌小学校を訪問し「地域の風景と文化に焦点を当てた貼り絵の共同制作」の活動を行った(Fig.9)。

作品のテーマは「考古園」、「虎舞い」の2つで、第3学年の70名の児童が2班に分かれて2枚の貼



Fig. 9 大槌小学校での指導

り絵の制作を行った。「考古園」は、リアス式海岸特有の地形や岩肌で知られる景勝地である。「虎舞い」は釜石市と大槌町に伝わる伝統的な舞いで、毎年、地域のお祭りで披露されている。2つの題材とも子どもたちにとって思い入れのあるものとなっている。

② 赤崎小学校と蛸ノ浦小学校での活動

2015年8月20日、赤崎小学校と蛸ノ浦小学校を訪問し「地域の風景と文化に焦点を当てた貼り絵の共同制作」の活動を行った(Fig.10)。テーマは「大船渡の海(ぼくたちわたしたちの海)」で、第3学年の25名の児童が共同で制作を行った。



Fig. 10 赤崎小学校と蛸ノ浦小学校での指導

③ 貼り絵の制作過程

制作のための時間は2時間(45分2コマ)であるが、学校生活にストレスを感じている児童の集中力の持続時間は短いと考えられた。この時間内での完成は難しく、そのためTable2に示すスケジュールで役割を分担した。筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部専攻科には造形芸術科があり、今回はそこ

Table2 貼り絵制作のための役割分担

大槌・赤崎・蛸ノ浦小学校 ・テーマについての児童による話し合い ・テーマの決定と資料の送付 ↓ (送付) 筑波大学附属聴覚特別支援学校 ・下絵の作成と分割 ・色紙の準備 ↓ (現地に持参) 大槌・赤崎・蛸ノ浦小学校 ・制作 ↓ (現地から移動) 筑波大学附属聴覚特別支援学校 ・仕上げ ・額装 (完成)
--

で学ぶ生徒が1名同行したが、下絵や仕上げをする際に制作にもかかわった。岩手県の小学校の児童と本校高等部生徒のコラボレーションとなった。

制作のプロセスだが、B1サイズの台紙に下絵を描き、それを30個に分割して縦14.5cm横17.2cm程度の長方形の台紙を作り、これを児童1人当たりの担当とした (Fig.11)。極めて小さいが、色紙を細かくちぎって貼る等の作業には時間が必要になり、時間に制約がある活動のなかでは適正な大きさであった。最後にそれをつなぎ合わせて大画面とするが、1つ1つのパーツをなす長方形の中の色が違っていることから、境界に微妙な色調の変化が表れ予期せぬ効果を生み出した。貼り絵による共同制作が児童たちに楽しく受け入れられるのはこうした技法の特質があるからではないかと考えられる。ここで使用された色紙は、バチック技法で手作りしたものであるが、B4の大きさのものを100枚準備した (Fig.12)。

なお、赤崎小学校と蛸ノ浦小学校のテーマは「大船渡の海(ぼくたちわたしたちの海)」であり、自分が興味を持つ海の生物とともに泳ぐという設定を児童たちが考えた。そのため、自分自身と海の生き物を描き、それを色紙で模様等を施したペープサート (Fig.13, 14) にして画面の好きな場所に張り付けるという手法をとった。

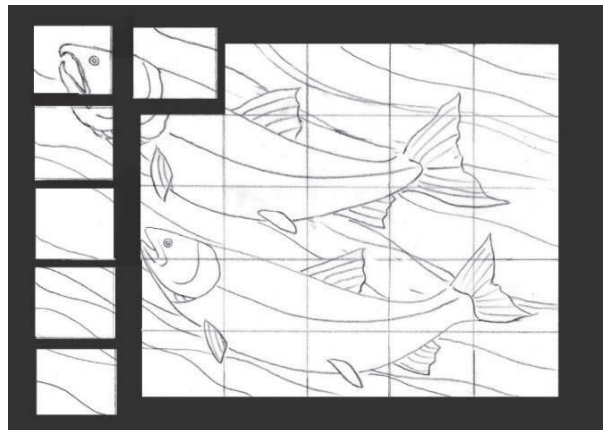


Fig. 11 分割のイメージ (2014年の作品)

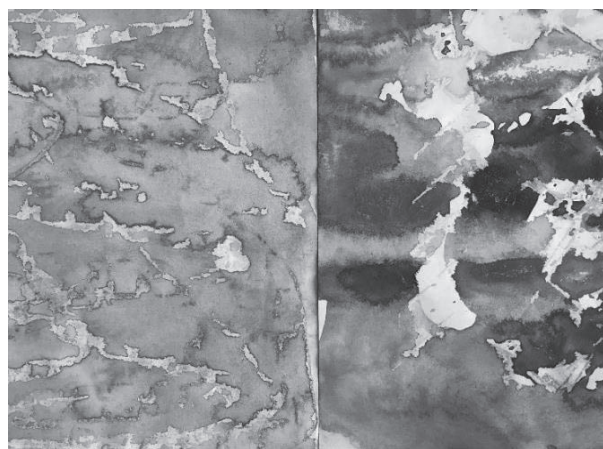


Fig. 12 バチック技法で作った色紙

④ 児童たちの反応

児童たちは「貼り絵」の共同制作に真剣に取り組んで作品を完成させ、充実感・達成感に満ち溢れた表情を見せた。この活動を通して地域の大切な風景や文化を、誇りと共に深く心に刻むことができたと考えている (Fig.15~17)。

また、事後に送られてきた手紙には「貼り絵」の共同制作に興味や関心をもったこと等が綴られてい

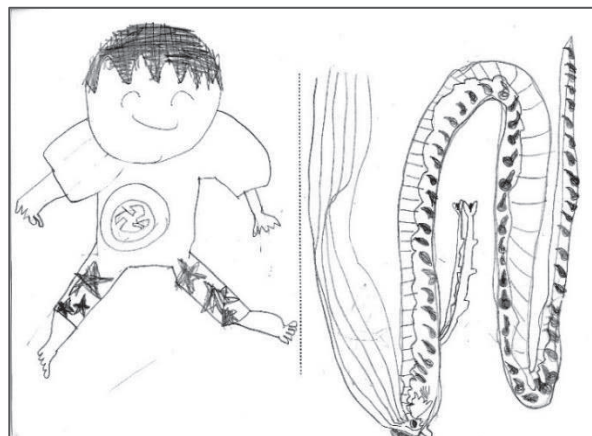


Fig. 13 ペープサートの下絵

た。児童たちにとって貼り絵がもつ表現の可能性に触れる機会になったこともわかった(Fig.18)。



Fig. 14 貼り付けたペーパーアート



Fig. 15 「大船渡の海（ぼくたちわたしたちの海）」
赤崎小学校と蛸ノ浦小学校の児童作品



Fig. 16 「虎舞い」 大槌小学校の児童作品



Fig. 17 「考古園」 大槌小学校の児童作品

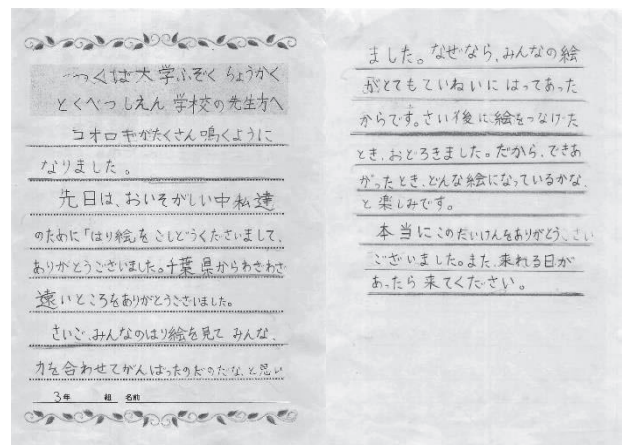


Fig. 18 児童からの手紙

⑤ 事後の活動

現地での制作が終了しても次のフォローアップにつながる活動を継続する必要があると考えた。作品を多くの人々の目に触れさせることは、児童たちのさらなる自信につながる。また、多くの人々の共鳴が得られれば、さらに別の支援の輪が広がることを期待することができる。貼り絵作品は以下の3カ所で展示を行った(Table3)。

期間中多くの来場者があり、活動とその成果を広く発信することができた。市川市南図書館での展示では活動に参加した本校高等部専攻科の生徒がポスター制作担当した(Fig.20)。この他にもクリアファイルを作成し、制作に関わった児童に配付した。活動を記憶にとどめさせるためにも形を残すことは大

切だと考える(Fig.21)。

Table3 展覧会の開催

a	2015年 11月	本校校舎（文化祭）
b	2015年 11月	大槌町中央公民館
c	2016年 1月	千葉県市川市南図書館(Fig.19)

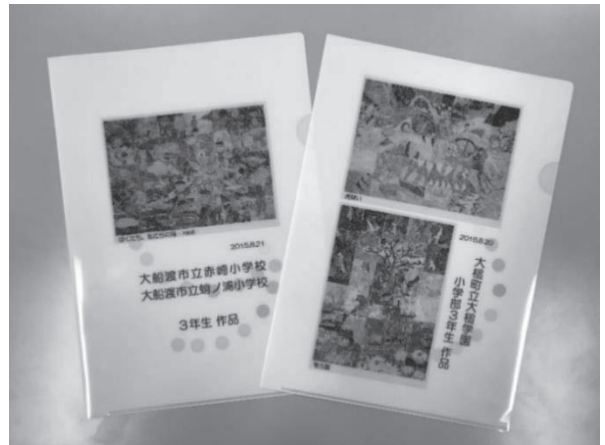


Fig. 21 クリアファイル

その際に被災のダメージを受けたり、ストレスを抱えた児童の対応に追われたりするなかで教師自身も疲弊しているという実態を知った。これを受けて、「2015年度筑波大学社会貢献プロジェクト」では、児童だけではなく教師に対する支援の方法についても考えることにした。児童を支援するためには周囲の大人（教師）に対する支援も欠かせない。この視点は Table1 として先に示した「地域社会にもたらされる成果・効果等 a~c」「大学教育との関連性 a~c」の設定につながり、全体の復興支援計画の目的と内容として設定された。ここでは「貼り絵の共同制作」以外の活動について簡単に紹介する。

・手話の授業

第4学年の60名の児童に対し「手話」についての授業も実施した。これは Table1 (2) -c の「筑波大学が考えるインクルーシブ教育の推進」に該当する。授業では、挨拶等の簡単な日常会話を紹介したり、「手話クイズ」で動作の意味を考えさせたりしながら「手話」について興味・関心を引き出し、理解を深めた（雁丸，2017）。

・授業の観察

学校に設置されている特別支援学級を訪問し相談業務を行った。これは Table1 (1) -a.b に該当する。訪問した小学校には「知的障害」「情緒障害」を有する児童が在籍していることから活動に参加した筑波大学附属大塚特別支援学校の教員がこの業務を担当した。また、登校しても授業に参加できない児童が多く存在したため、震災後のストレスから不調を訴える生徒についてその状況の把握に努めた。現



Fig. 19 市川南図書館での展示を紹介する記事

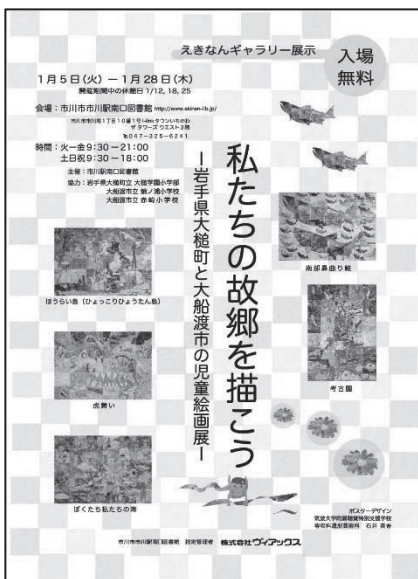


Fig. 20 展覧会のポスター

⑥ プロジェクトでの様々な活動

2014年の「Book and Dream Project」で活動した際に、被災地域の多くの教師と交流を深めたが、

地での支援活動が一段落したあとも、メールによる相談業務を継続できるように窓口を設けた。

・障害者への聞き取り調査（震災時にとった行動）

大槌町で生活を営む聴覚障害者を訪ね、震災時の行動について聞き取り調査を行い、災害時に障害者に対してどのような支援が必要かについてまとめた。これは、活動に参加した本校の地理歴史・公民科教諭が担当した（雁丸・橋本，2016）。

4 まとめ

Table3 学校支援における配慮事項

- 全体を通しての配慮事項
- a 学校のニーズを確かめ、それに対する適正な支援を心がける。また過度な支援を行わない。
- b 支援する側の学校の教育的資産を活用し実施可能な支援を行う。無理な計画を立てない。
- c 支援に必要な物資や機材は支援する側の学校の責任において準備する。支援される側に対する要求は軽微な事柄にとどめる。
- d 連絡を密に取り合い支援を継続できるような信頼関係を築く。
- e 児童に対する支援以外にも周囲の大人（教師）に対する支援を同時に考える。
- 美術に関連する支援を行う場合の配慮事項
- a 校外で展覧会を開催し作品の価値を発信する等、児童の自信や誇りの涵養につながるような企画を考える。
- b 記念品の作成や校内展示スペースを設けるなどして、長く記憶されるような仕組みを残す。

「地域の風景と文化に焦点を当てた貼り絵の共同制作」の実践は、「地域の風景や文化を貼り絵で表現し、その美しさや良さを理解することにより地域に対する自信や誇りを取り戻すこと」「共同制作により人と人とのつながりや協力して物事を成し遂げることの大切さを知ること」の目的を十分に果たして終了することができた。「貼り絵」は、美術教育に関連する内容でのワークショップに適した技法であり、支援活動を含めた様々な場での用いられ方について多くの可能性が期待できる。

また、災害時等の学校が学校に対して行う支援の在り方についてだが、はじめの段階では生活用品、食料、教具等の物資の寄贈などを含め様々な形態が考えられよう。しかし、地域や児童を支える学校や教師が疲弊する場合には、人的支援が最も心強く感じられる手段ではないかと考える。訪問した学校には高価な備品が寄贈されていたが使用された形跡がないものも多くあった。人的支援によって、わずかな時間であっても授業を肩代わりすることの意味は大きい。また多くの人間が学校現場に顔を出すことで学校が賑わい、それが児童の心に楽しさや安心をもたらすことになる。人と人とのつながりが被災地の児童や教員にとっては大きな励みとなる。こうした形での支援活動の在り方は今後も継続して考えられていくべきであろう。

最後に、本文で述べた内容の繰り返しになるが、被災地の学校を支援する際に配慮すべきことについて Table3 に記しまとめとする。

〔付記〕

本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。

〔引用文献〕

- 雁丸新一・橋本時浩（2016）聴覚障害生徒を対象とした東日本大震災から学ぶ授業の実践報告．聴覚障害，71（766），54-59.
- 雁丸新一（2017）聴覚障害生徒のキャリア発達に関する事例的検討．筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要，39，84-87.
- 橋本時浩（2016）私たちの故郷を描こう-貼り絵で表現する故郷の文化と誇り-．筑波大学環境報告書2016年，29-30.